# あるロマンチスト（小島文八）の生涯 (一)

藤井公明

## 一　「哀調」

### ○そのころ

小島文八は、シャトウブリアンの珠玉の名作「ルネェ」を、最初に邦訳して、それを「哀調」と題して出版した注目すべき人物であった。それは、シャトウブリアン文学の紹介であると同時に、当時としてはめずらしいフランスローマン主義文学の潮流を、はじめてわが文学界にしめした名篇だったからである。

正宗白鳥の[注(1)]「獨歩と花袋」に

私は学生時代に、或同級生に連れられて、田山花袋を牛込喜久井町の小さな家に訪ねたことがあった。花袋の新婚直後であったと、後になって氣がついた。その時小島文八とか云ふ佛文学者が来てゐて、シャトウブリアンの話などしてゐた。当時フランス文学をやってゐた者は少かったので、私はその人の話を珍らしい思ひして聞いてゐた。そこへ、国木田獨歩が訪ねて来たが、手土産持参であったらしく、花袋夫人が茶の間の方で礼を云ってゐたので、私の耳に留った。（以下略）

とある。

花袋が、友人太田玉茗の妹伊藤リサと結婚したのは、明治三十二年二月九日であったから、この話は、その年の春頃だろうか。花袋二十八才、リサ二十才。白鳥と文八は、ともに数えの二十一才ではあったが、白鳥は三月生まれ文八は十二月生まれであり、白鳥は九カ月の兄であった。しかし背の低い田舎者の白鳥には、身体も大きく服装も整っていた文八を佛文学者と見ている。

三十一年三月明治義会尋常中学を卒業した文八は、その九月、東京商業学校に附設された東京外国語学校佛文科に第一期生として入学した。だから白鳥の見た文八は佛文科の一年生だったが、父も母方の一族（川路聖謨の一族）も語学の達人がそろっていたから、文八の語学は抜群だったようである。白鳥が佛文学者と見たのはその文八だったのである。

「哀調」は、三十五年十一月、白鳩社から出版されたが、巻頭にシ

ャトウブリアンの写真をかかげ、その裏には、—草[注(2)]わかばの詩人に献ず—の献詞がある。そしてそのはしがきには、

幻にみゆるはウェルテルの姿なり、グラジエラの面影なり。
西の邦のうた人が、さこそ伝へけん幽愁の想ひ、いまはわがみの上なりけん。
われは蒼海をおもひつ、曠原を恋つ、ただそこに漂泊の生を送らばやと。
空の鳥をみてはそが自由なるを慕ひ、野の花を見てはそが麗はしきをぞうらやむ。
こはまことにわが心にして、またシャトブリヤンが若きルネェのこころなりき。
ああ、ルネェよ！さちうすきルネェよ！われもおんみとひとしく、あるときは愛にすがり、またある時は自然にすがりぬ。
さはれ、さだめよわきわれらは、とはに命運の神のにへにして……
ああ、いまつたなき筆のたよりをぞゆるしたまへ。
そはわれも、をんみとひとしく、世紀のわづらひに、なやむのひとりなれば。

ゆうづきうすき
あを葉のかげにて
洒　生しるす

とある。

このはしがきは、文八が主人公ルネェに呼びかける形態になっていて、彼自身の強い共感共鳴が歌われている。ペンネームの洒生も洒風の号とともに、シャトウブリアンに傾到する青年の意味である。三十五年初夏の作とすれば、文八が七月に外国語学校を卒業した頃である。

未亡人かね女史の話によれば、文八は、三十一年九月に外国語学校に入学したが、父好問(よしただ)中佐のすすめにより、幹部候補生を志願して、近衛師団麻布聯隊に入隊している。それは三十二年の冬から三十三年の冬までだったので、そのため卒業は一年おくれて、三十五年七月になったと言う。しかし文八のシャトウブリアン傾到は、すでに三十二年頃から始まっていたので、ルネェの最初の釈は、麻布聯隊時代から手がけられていたようである。

明治三十三年から新世紀が始まったわけではあるが、ショペンハウエルらを中心にして高まった十九世紀後半の厭世思想は、当時の日本の青年たちの心を大きくゆり動かしていた時代であった。藤村操が華厳の滝に投び込んだのもこの頃であり、夏目漱石が後に書いた小説「心」の主人公やその友人Kも、やはりこの時代の青年たちであった。

大正末年頃文八の書いた「生命の廃墟」[注(3)]によれば

中学生の頃、北村透谷の心靈的微光に、有限の無価値を痛感し、湖処子の十二文豪ウォーヅオースに、ライダルの詩聖が汎神的靈感の詩趣を感得したこともあるが、其後松村介石氏のデビニチーと、内村鑑三氏の時勢の観察には、或種の宗教的共鳴を覚へ、爾来基督教的傾向に加味するに、カーライルの神秘的熱烈の思想を以てした。

神なくしては生きることが出来ぬような宗教的情感に刹那(せつな)も離れ

るに忍びなかった当年の僕ですら、所謂伝統的基督教の殿堂には常に一種の倦厭を感じて、牧師の説教は寧ろ神の意志に反するもののように嫌い、殊に信者のそらぞらしい祈禱と、軽佻でありながら、如何にももっともらしい説教者の口吻には、虫唾が走るくらいに思われた。

（以下略）

とあるが、ここには、やがて彼が外国語学校佛文科に入学するや、「基督教の生靈」の作者シャトウブリアンにあこがれるようになる心の前歴が示されているように思われる。

田山花袋の[注(4)]「東京の三十年」の中にある『新しき思想の芽』には、

紅葉を中心にした藝術が次第に新しい時代に壓迫されて、いろいろな方面から、新運動らしいものが起った。これは明治二十八九年頃からで、これから紅葉の病死まで五六年の間、かれは常に陰に陽にこの新しい運動と戦った。

一番早く反G社の傾向を表はしたものは、国民文学派であったと思ふ。つづいて千駄木の鷗外漁史の提唱が間接に若い人達にさういふ気分を起させる動機をつくった。「国民之友」の批評家八面樓主人などは殊に紅葉を排するために、その社中の川上眉山を分外に賞めたりなどした。それに、帝国大学から出た若い人達の間にも、大家―旧時代に対する新しい運動がかなりに盛んに起った。高山樗牛がその第一人者である。

とある。中学生の文八が、「文学界」や「国民之友」派の文学を愛読して、心をときめかしていたことは、前述した「生命の廃墟」の自記でも明らかである。

樗牛は、二十七年一月「滝口入道」（読売懸賞作品）を発表して以来、美文調の評論や随筆を書いて、多くの文学青年に敬仰されていた。彼は「国民之友」[注(5)]夏期附録にのった田山花袋の「わすれ水」をも、

「わすれ水」は小説と云はむよりは、むしろ無律の抒情詩なり。…

と激賞して、花袋を感泣させている。つまり樗牛は、当時のローマン主義文学界の第一人者だったのである。

その樗牛は、明治三十年十二月一日、学士院会員杉享二の次女里子と結婚した。杉は幕末以来、勝海舟や西周などの仲間で、明治の文明開化の指導者であった。里子の兄杉文三の妻は、大越貞五郎の四女で、文八の母方の叔母だった。文八は一人子だったから、里子は姉妹のようになつかしい人だった。したがって樗牛もまた義兄のようにしたわしい人になったのである。「哀調」の美文調は、あきらかに樗牛の影響であった。

「生命の廃墟」に、外国語学校第一期生の親友尾花繁太郎のことを書いた一節に、

熱烈なる情熱の彼は、バイロンの如く、シェレの如く、ロマンチシズムの血潮に燃へて故山に帰ってからも黙々として無為に過ごすには余りに多感であった。

当時の若き彼は、樗牛の真骨頭なる文字に接して、知己の感を懐き、虚偽の道学先生や浅薄なる学究の痛罵に溜飲を下げ、其獅子吼

せる火の如き論旨に同感し、激越奔放なる破邪的精神運動を讃美した。殊にその不治の宿痾に対しては、無限の同情を洒（そそ）いで居った。
宗教に対してはまだ批判的立場にあったが、深く宇宙の神秘に黙契せんとして熱悶せる彼は、其頃嘲風の論議によほど共鳴して居ったようだ。（略）

とある。これは、樗牛が、三十四年八月の「太陽」に『美的生活を論ず』を発表した頃のことである。尾花は卒業して郷里に帰り、文八は一年留年したので在学中であった。無二の共鳴者尾花のことを語ることは、また文八その人を語ることでもあった。

樗牛は結婚後も宿痾の療養に明け暮れしていたので、文八が、この人と面接することはほとんどなかったかも知れない。三十三年六月、審美学研究のため獨佛伊三国へ三カ年の留学を命ぜられたが、留学延期願を出したまま、興津や大磯に転地療養をつづけていたのである。『清見寺の鐘聲』や『思ひ出の記』は、ともに三十四年五月に発表された樗牛の随感であった。文八や繁太郎らの文学青年たちが、感激して読みふけった美文であった。

「哀調」の出版社、白鳩社については、窪田空穂が次のように言っている。

私の親戚の市岡伝太といふ人が、明治三十年代に、道楽に小出版をしていた。白鳩社といって、処女出版として服部躬治の歌集「迦具土」の出版をし、後には、蒲原有明氏の「獨絃哀歌」など、やや多くの特殊なものを出版した。この市岡は、下総流山町の秋元洒汀氏と親戚であった。秋元氏は俳人として名を持っており、文壇には知人の多い人であった。この人が機関雑誌を持とうとする心があった。それが、明治三十五年に、市岡をとおして、出版費だけは受持つから、雑誌を出さないかという相談となったのであった。
この相談はすぐにまとまった。当時、私は吉江孤雁（喬松）君、水野葉舟君と、同じ家にいて、同じ学校に学生として学んでいた。第一の仲間はこの連中であった。その家へ絶えず遊びに来ていた同じ学生の仲間に手塚篤（紫袖）君があった。この人はきわめて交友の広い人であった。平塚君をとおして、蒲原有明氏、小山内薫、小島洒風など加わり、それがひろがって、小山内君の令妹八千代女史、蒲原氏の交友柴田流星、斉木仙酔氏などにも及んでいった。吉江君からは中沢臨川君に及び、私からは故三津木春影、太田みづほのや（水穂）、今福岡日日の主筆をしている坂口二郎、岩本堅一（素白）君などに及んでいった。また秋元氏からは、国府犀東氏など、飛びはなれた方面の人の寄稿もあった。
（略）

ここには白鳩社と、三十五年五月五日に創刊した「山びこ」同人の名が紹介されている。文八も、その創刊号に、ドーデ作洒生釈として『燈台』の一文を寄せている。

「哀調」に献詞をかかげた蒲原有明は「山びこ」同人でもあった。しかし文八がこの人と親しくなったのは、それより前であろう。有明は三十一年上京するや、巌谷小波の木曜会に入り、五月には小波の紹

介で、第二作「南蛮鉄」が「文芸倶楽部」にのった。九月頃からは詩作に専念するようになったが、木曜会の仲間であった。また三十二年には島崎藤村の紹介で、田山花袋や柳田国男と交際を結ぶようになりさらに三十三年には「新聲」詩壇の選者となっている。しかし三十三年の暮までは、文八が麻布聯隊に入営していたので二人が親しくなったのは、その後と考えたい。

文八が一期おくれて外国語学校に復学した時、同級生に、小波の弟巌谷春生がいた。春生の紹介で、文八は巌谷門下の木曜会に仲間入りした。有明と親しくなったのは、その後であろう。有明は、三十四年八月から、後の第二詩集「獨絃哀歌」の巻頭に収められた獨絃哀歌と総題する四七六調のソネットを「明星」に連載し、さらに三十五年一月には新聲社から第一詩集「草わかば」を刊行した。

「草わかば」は、藤村詩をこえて、新らしい詩境を展開しようとしたものであった。自然現象の中に永遠なるものを見つめ、そこに心の安らぎを求めようとするものであった。さらに、「獨絃哀歌」には、キリスト教的罪の意識が加わった詩句が、混入されるようになっている「哀調」と共鳴する世界であった。文八と有明の接近もこの頃であろう。

**○シャトウブリアン文学の紹介**

前に引用した白鳥のことばにもあるように、当時は、フランス文学を語るものも少なく、シャトウブリアンは、日本では未知の作家であった。だから、文八はまずシャトウブリアン文学の紹介から始めなければならなかった。

シャトウブリアン及其著作

前世紀の始に於て、われらの詩人シャトウブリアンは、痛絶なる人生の愁思を訴へぬ。そが空前の傑作アタラ（Atala）とルネェ（Reni）とは、なにら尚き紀念ぞや。

人生のこと常に紛々、さはれ大自然はとこしへに悠久なり。そのむかし、女詩人サッフォーの涙を洗ひてしロイカデラの海辺、今なほ波濤のおとづるる様、むかしに似たらずや、バイロン、シェレー逝て幾星霜。かしこナポリの空は、いやさらに深碧なるにあらずや。われら、人生てふスフィンクスの謎語になやまさるるもの、誰かはひとたび自然てふやさしの母の乳房にすがらざるものやあるべき。シャトウブリアンは、さこそ自然の緒琴に触れ、そがこころの奥に秘めたる人生の委曲を奏でぬ。

誰か文化の至精を解して、なをかつ荒野の空漠を愛づるものぞ。ただ、このこころ、まことにいひがたき人生の悲痛にこそ。

われら生を人の世にうく。矯飾やむのときなく、煩悩の鉄鎖また觸くによしなし。罪業の深穽、たえず脚下に闇ふして、疑惑の深渕、とはに永遠の死滅をみちびかんとす。このとき、おのが幻影を追ふてすすむ空想の児、いかんぞわづらひなきを得ん。ただ荘麗の自然あり。悠々の清興あり。かくてわれらが安立を得せしむ。

シャトウブリアンは枯淡冷々の合理主義を退け、すでに徒らに煩鎖なる十八世紀の哲理を蹂躙し、ここにあらたなる近世思潮の源をさ

ぐりぬ。

その初め、ルーソーにより訴へられけるロマンチックの機運は、べルナルダンドサンピエル（有名なるポール・エヴィルジニーの作者）にその萠芽をあらはし、スタェル夫人によりて定義せられ、シャトウブリアンの手もて縦横に實行せられつ。

真摯の調、しかも醇雅自由奔放のうち、自ら清香の匂ひあり。われら、そが雄渾の風格に接するとき、青春のもゆる血潮、しらず脉絡におどるを覚ゆるなれ。

かれ若くして激切愁思の人、すでに世紀のわづらひ(Madie du siecle)になやむ。希望なく、規律なく、あるは自殺、あるは漂泊を思ふ。

西暦千七百六十八年九月、かれはサンマロ（Saint malo）の地に呱々の聲をあげぬ。そは現實界の超人ナポレオン（Nopoléon）と時を同ふしつ。身は名門の公子として貴き生をうけつるも、家庭たえず秋風吹きすさみて、ただ多恨なるかれの、わづかに少妹リュシィルの春光に浴するありしのみ。はやく身をナヴワール（Novarre）の軍籍に投ず。さはれ、もとむるところ、ルーソーの情想のみ、サンピエルの藻思のみ。いつかは人生疑惑の街に彷徨し、幽愁また幽愁。かくてひとたび（１７９１）新大陸（Amerizue Centrole）荘麗の自然に浴し、原始朴實の俗に黙契してよりは、天與の情火とみにもえいでて、幾多尚き紀念をぞのこしぬ。そはまづ英国瓢零中、ナッチェ（Natchez）の大手記におさめられ、千八百〇一年にいたりて、空前の傑作アタラ（Atala）の一巻にあらはれ、ついで、われらのものするルネェ（René）の物語にいたりて高潮に達す。そが訴ふるところ、まことにあたらしき感情にして、騒壇はつたへて、近世の幽愁とはよぶなる。こは文界における最新の紀元なり。ハイネ（Heine）に似かよへるラマルチン（Lamartine）バイロン（Noveau Biron）の子としいはれたるミュッセー（Musset）またこのうちよりうまれぬ。

なほかれの敬虔なる宗教観を有せる、あらはれてミルトン（Milton）が失楽園（Paradise lost）の翻訳となり、またかれが作中の白眉基督教の生霊（Génie du Christianism）となりて発展す。そはかれが眼に映ずるところ、詩歌の宗教なり、宗教の詩歌なり。美は宗教にはぐくまれて精華をみるると、かれにしてこのことの葉あり。まこと文学美術のこころにかなひたらずや。東欧の覊旅は、ジェルサレム道中記（L'Itinéraire de Paris ā gerusalem）としてのこり、羅馬二歳の境地は、殉教者（Les Martyrs, 1826）及びデルニアルアバンスラァジ（Aventure du dernier Abencerage, 1826）の二巻を賦せしめぬ。

かくて千八百三十年の革命の後、かれはその公生涯よりしりぞきて（かれの情熱家にして、一度は羅馬駐剳の全権公使たることすらありき、その頭脳のすぐれたる思ふべきこそ）、全く著作に身をゆだねつるかたわら、かのめでたき Mémoire d'outre - tombe の編輯に手をそめぬ

ああ、われらの詩人シャトウブリアンこそ、げに近世思潮の豫言者ローマンチック Romantique の開祖とたたへつべけれ。（ユーゴー

Ugo も、シャトウブリアンによりてはぐくまれたるひとりなり）。そのもゆる情想、繪よりもうるはしき自然の描寫、その体の清くして秋の月影みなもにすむに似かよひたる、まことやわれらがわすれがたきたまものにこそ。

　引用が長くなったが、当時の日本文学は、「明星」派詩人を中心にして、ローマン派文学の全盛期であった。その意味では、この解説は注目すべき名文だったのである。

　文八は、シャトウブリアンこそは、近世思潮の豫言者、ローマン主義文学の開祖であると激賞して、『そのもゆる情想、繪よりもうるはしき自然の描寫、その体の情くして秋の月影みなもすむに似かよひたる』と書いて、その詩情を紹介しようとしたのである。

**○「哀調」の内容**

　アタラとルネェは、シャトウブリアンによって作られた二つの関連する物語であった。前者は、ナッチェに住んでいたインディアンの盲目の長老シャクタス老人が、彼の養子になっていた若いフランス人ルネェに語った、永遠の心の妻アタラの物語であった。後者は、ルネェが、シャクタス老人にうながされて語りだした永遠の姉アメリーとの物語であった。シャトウブリアンは、当代の合理主義思想によって見失われがちになったキリスト教の神随を、神秘にみちた大自然の中をさ迷う幽愁の人たちによって再探求させたのである。

　文八の選んだルネェは、シャトウブリアン文学中白眉と呼ばれる名文であった。幽愁と名文にひかれたのであろうが、ルネェとシャトウブリアンを重ねて描き出した幻影に、文八その人が心酔しているさまは、「哀調」の序文その他でありありと偲ばれる。ルネェという原名を捨てて「哀調」と題したももそのためであろう。さらに「哀調」が「草わかば」の詩人に献じられ、「獨絃哀歌」の一巻が返礼として「哀調」の訳者に献じられたことも、「哀調」が、物語詩を意図したことを暗示しているようである。

　詩的調べを追求したためか、文八は、しばしば原作の部分的省略を試みている。しかしそのためか、原作に秘められた思想が多少あいまいになっている。それに、西欧キリスト教徒の懐く、神に対する罪の意識の微妙さは、異教徒であるわれわれ日本人には難解なようである。

　出生と同時に母に死なれたルネェは、姉アメリーのみが心の友であった。やがて父が死ぬと、二人は兄の遺産となった父の城をはなれ縁者の老人のもとに身をよせるようになった。

偽りおほき人の世の道路にぞありける。そがいりくちのほとりに立ちとどまりつ。なまなかに足ふみいるることの心にかかりて、あるはこれ、あるはそれとさまざまにおもひをくだきけるが、かかるをり、アメリーはいつしも宗門の生活の限りなく幸おほかるべきをかたりて、ただうつし世にわれをとどめたまふは、ひとりおんみのいますなるにてとぞ、うるみし憂愁の眼をわがうへにふるるなる。

（中略）

われはおくつき近く進み行きて、そこにつたかづら生ひまつはれる十字架のたてるをながめつる程に、いまさらとてこころのうちをお

もひわづらひける。

かくてわがおもひちぢにめぐりめぐりつ。いまははや羇旅(きりょ)に身をおかんとぞこころさだめぬ、さればとて姉にわかれを告げばやとおもひたちて行きつるに、かれは、われとはなるることの幸多かりきごとよろこばしき様して、われをかきいだきければ、われなにとはなしに、人生友情の矛盾なるにがき思ひをなしける。

とあるが、ルネェは、姉が、自分が旅に出て離れてゆくのをうれしそうにしているので、少しがっかりしたのである。

しかし旅に心ひかれていたルネェは、姉のことを、あまり氣にしないで、一人幽愁の旅に出かけたのである。

われひと日エトナの高嶺にのぼりぬ。そはシシリーの島のもなかに燃えて、みるからおそろしき熱炎をぞ噴くなる。

いまわれその頂きにたつ。あけぼのの光いつしか、まへなる地平線の茫漠にさしそめて、ふもとにはシシリー島のほのみゆるなる。海は遠音をたててはるけく空間に、うづまくぞきこえしが。瞰(み)下せば垂下萬丈、江河のながれはいくすぢとなく、さながら地圖に畫線ほどこしたらむごとし。

眼はやがてエトナの火口にしづみつ。そこにわれは暗烟をふきやぶる熱炎のほとばしるをながめつるが。

ああいま情緒に狂ふひとりの若者の、高嶺火口のほとりにたたずみて、あはれ生(せい)ったなき人間のうへに泣くみれば。翁よ！　おんみらは、そをいかにとおぼしたまふにや。この光景のすさまじきこそ、げにわかきルネェのかたみのうつし繪とをもひたまはれ。かくて渺(びょう)漠(ばく)に、造花(ぞうか)のおもかげとらへつれど、そのかたには深渕のおそろしきがひらきて。

ものがたり半(なかば)にしてルネェは黙しつ。ふかき空想の渕にやしづみつらむ。

これは、ルネェが、姉の深い心のなかをも知らずして、激情のままに旅をつづけていたことのおろかさを、述懐している段である。

ルネェ、そはアメリーの弟なるかれは、しばし心しづめつ。ふたたびそが情緒の歴史をぞひもときぬ。

かなしきかな、翁よ！　わがいとけなきとき、この榮(は)えある世紀は、すでにすぎて、われはかはり行く世の様をなげきしのみ。かくてわれ故郷にかへりしも、とこよのなやみはとはに消えずして、わづらひ世々にしげく、うつし世のものはわれになにものだもおしへざりき。

わが姉は、いひがたき心よりして、わがつかれをまさむとはなしぬ。かれは、わが到着の数日前に、巴里(パリー)をはなれてありしかば、われは水莖に思ひのたけをこめて、ただひとときのめぐりあひをぞもとめける。そはやみがたきつとめの業(わざ)あればとて、わが切なる心に肯ぜずしてありき。あはれ、いかなるかなしき思ひでのわが友情のうへになかりしか！

われはやがてわがふるさとに、異邦びとのごと、はかなく寂寥(せきりょう)の生をおくりつ。

とあるが、前半はフランスの黄金時代であったルイ十四世の時代もすぎ去って、人々のなやみは日々に増すばかりであったと語る。後半はルネェが帰る数日前に、理由もつけないでアメリーがパリを去ってしまったことをなげいているのである。

孤獨の淋しさと迷いのなかで、ルネェはさまざまな試考錯誤を重ねながら、しだいに絶望的になり、死を決意してアメリーに手紙を書く。

　われは人生の重荷より解脱せむとおもひさだめぬ。かくてアメリーに宛てたる一封を認めつつも、そがうちにわれは、さまざまにわが秘密の矯偽をぞなしたりける。

　さはれわが姉、わが心靈の洞奥を観破るの明ありしかば、一言の答だになく、俄然としてわがもとにおとづれ来りぬ。このうつし世に於てわがめでいつくしみしただひとりのものよ、われはおさへがたなき心臓の鼓動をもてアメリーをむかへぬ。

　そはわれをきくひとなくて過ぎにしことのいとながかりしに、今ぞわれそのまへに情緒の委曲かなづることのかなひて！

　（中略）

　朝はやさしき姉の聲きて、われは悦びと幸福とにおののきつ。自然のたまものなるアメリーの聖情よ。かれが心靈の、そが肉体にふさはしきうるはしさもちて、さては感情の温和ぞ無限なる。かれがおもひにふるるとき、人はさながら楽堂にあるのここちす。かれは婦人の愛と天使の純情とをそなへぬ。

とある。

しかし、冬も終りに近づいた頃、アメリーは安静と健康を失ってきた。こうして三月は立ってしまった。ある日姉は、一通の置手紙を残して、修道院に去ってしまった。彼女はいつまでもこのような生活をつづけていると、ルネェがますます偏執的な人間になってしまうことを恐れ、弟には結婚をすすめて、自らは宿願であった修道院入りを決意したのである。その手紙の一節を引用すると、

　なほ結婚したまふことの、おんみにいかばかり慰籍おほかるべきをおもへ。なにとておん身となつかしむなるをみなのなからむやは。才秀で情こまやかなる、さてはおんみのけだかきおもかげ、など女の愛とこしへにおんみのうへにあらざるべき。

　ああかくておんみのわづらひや、やわらがむ！かれぞすべての愛にして、そはあらたなるおんみの姉妹をこそ見いだしたまふべし。われいま僧庵にむかふ。海のほとりにたてられたるこの尼寺ぞ、わが心靈のさまにかよへる。夜にいりて僧房のおくふかく、われは庵室の壁にささやくなる浪のおとづれきくべし。そのとき、わが胸には、おんみと漫ろありきしつる、ふかき森のかげあらはれて、そこにさそひくる松籟の鼓を、海の青色とおもひなせし當時のさまなど、うかびいづることのあらむ。いとしきわが稚きよりの友よ、われはもはやおんみにまみゆることのなかるべきか。ああおもへば、むかしわれは、おんみの揺籃をうごかし、しばしばおんみと共にねむりつることのありしか。

　さるにても、ああ、おなじおくつきのひと日、われらをむすびつる

ことのありしよ！さあれ、今はた、われは聖堂の冷やかなる大理石のもとに、愛なきをとめのむれとともにねむらなむ。

このふみ、まことよみにくしとやおぼさむ。さはれわがうす墨涙にきえつ。いとしきルネェよ。いかにわがおもひ出のとくおんみの心よりきゆることのあるべきか？をわがひとりのなつかしき弟よ！さらば、こはとこしへにおんみとのわかれにこそ。

アメリーより

おはりにのぞみ、われはわが財産の贈与を、おんみにしるしおかむ。こはわがねがひぞ。おんみ、わがまごころの雫くみたまはらむことを。　さらば。

文中の、おくつきのひと日とは、父が死んで姉と弟の愛情が、ますますこまやかになったことを、さしているのである。

この手紙を受取った後のルネェの悲しい物語は、せつせつとつづくが、結局姉の得度の日、その式典にたちあうことになったのである。

われさまざまに心みだれつつ、しばしくるへるをりからに、高僧ひとりあらはれ、アメリーよりの言傳なりとて、この日儀典をあぐるてふ禮拝堂のかたすみに、われをいざなひゆきける。

黎明の光いまさしそめて、鐘聲離愁のひびきあり。満眼の光景蕭條としてうらがなしく、寂寞の堂内、われは茫乎としてひざまづきぬ。

方丈ひとり嚴かに聖壇にたてば、あやしの鉄門ひらきて、アメリー倏忽とすすみいでつ。とみれば、かぎりなき粧ひの極美つくして、そがうるはしく崇高なることよ、いかで稱賛のことの葉のかなふべき。この清浄なる童貞のさまに、わが勢つき力くづをれて、心にふかき崇拝の念の、いやまさにたかまりける。

アメリー天蓋のもとに坐し、聖華薫香のもなかに、燭の微光をもて、犠牲の典ぞはじまるなれ。誦經の音につれ、方丈、まづ新尼の盛粧をうばひ、麻の下着一枚をとどめたるのみにて教戒の座にのぼる。やがて單なれど、いと感泣にたへざる温言もて、その場の説話をこころみつ。神のみまへに一命を献げたる童女の、幸ふかきことぞ述べたてしか。

方丈、その説教を終り、かの女の衣をふたたびあたへて儀典はなほづく。

アメリーは、わかき二人の尼にたすけられて、聖壇ちかく階段のもとにひざまづきぬ。かくて、われをして方丈に鋏をすすめしむ。などかばかりにして悶へのおこらざるべき。われはおそれて、そをさけむとしたるに、アメリーの勇気もてわれに一瞥をあたへけるに、わがちからおちて宗教はうちかちぬ。

かの女の心づよくもかうべをあげたるとき、その丈なすうるはしき髪のいくすじ、あはれ聖鋏のにへとはなりて、つぎに黒紗の長衣は華麗の女服をうばひつつ、麻の首帕の、そが額を蔽ひて、神秘の布は、圓頂のうへをぞつつみける。こは宗教と童貞との二つの徴象とかや。

ああ、その美はうせぬ。悔悟の眼は、うつし世の塵にむすびて、そが心靈の天つみ空にぞすぎゆく。

かくてわが姉は、大理石のうへによこたはり、そがうへに喪礼の衣ひろげられて、四個の燭光あたりをてらしぬ。

方丈は首に長垂(ちょうすい)の領飾(ひれかざり)をあて、手に一巻の聖經もちて、おごそかにぞ經文よみはじめける。若き尼僧等のそれにつづきて、ああ宗教の歓喜のいかばかり大なることよ。さはれ、恐懼(きょうぐ)、怖念(ふねん)のなにとはなくにおそひて!

たちまち慚愧のささやき、喪布のもとよりいでて、いたくわがはらわたを断ちしが。『大慈大悲の神よ、われをしてとこしへにこの葬床のうへよりおこしたまはざれ。ああわが罪の情にほだしなき弟のうへにめぐみおほからむことを!』

われは、この言の葉きけて、心狂ひ、情火燃えたるままに、喪者の蔽(おお)いものの上より身をなげかけ、姉が身を舁(か)き抱きて叫びぬ。『イエスキリストの清浄なる配偶(つま)よ。いまおんみの弟との悠久なる別離に最後の接吻(くちづけ)一つ與へたまはずや!』

この情、このさけび、この涙は、典礼を騒がしつ。方丈は中止し、尼僧等は格子門を閉じ、一群は動揺して聖壇のかたにおもむき、人は無意識にわれをはこびさりぬ。

いかにめぐみなき人々よ!

わが眼をひらきしときには、犠牲の典終りてわが姉の情熱たへがたきさまあるをみとめつ。

とある。

かくて、姉弟の聖なる情熱が、おごそかなるべき姉の得度式をめちゃめちゃにしてしまったのである。そのために姉は病み、弟は苦悶の心にたえかねて、新大陸にわたってきたのであった。

文八も言っているように、この物語は、「若きヴェルテルの悲しみ」に系列する、プラトニッククラブの悲話であり、十九世紀初頭のローマン主義文学の烽火(ぼうか)であった。

そして、物語詩としての「哀調」は、時には、樗牛の「平家雑感」を偲(しの)ばすものもあって樗牛の美文調の影響がみとめられる。

**○「哀調」の反響**

徳富芦花の霜枯日記[7]十二月二十一日の記に、

初雪さらさら、やがて雨となり、曇りて暮れぬ。燈下に「哀調」を読む。シャトウブリアンの「ルネェ」を小島文八氏が訳せしもの。若き心の悲哀を描きて「エルテル」と同じ系統に属すべきものなり。己と云ふ自覚ある青年にして、一度此悲哀の味知らぬ者あらむや。斯(か)かるものは人の世に憂のあらむ限り読まるべきものなり。余は原文を知らざれど、訳者が身読体察、深き同情もて味ひ且訳し、假(か)って自家の憂懐を遣(や)らむとせるには、何人にも明なるべし。訳筆上田敏氏の其(それ)を越(お)ふて、極めて雅馴(がじゅん)。ただ少しく隔靴(かくわ)の憾(うらみ)あり。

とある。上田敏との関係を除くと大体において安当な評である。詩的表現を追うためか、『少しく隔靴の憾あり』と評されたのであろう。

「山びこ」第九号(36・1・10)には、「哀調」を読むと題して、中澤臨川・小山内薫・三津木春影ら同人の所感がのせられている。臨川の所感の一部、

我友小島洒生兄、佛の文豪シャトウブリアンの筆になりし才人ル

ネェの愁を伝へて「哀調」成りぬ。淋しからずや、一片の名花、直ちにこれ訳者が憂愁の跡を伝へて、長く君が自序伝中のものたるべし。『されば宗門に帰依せんとの心あれども、理性の自ら不信なるあるをいかにせん。』とは、前世期の初期のルネェの嘆聲にして、やがてまた今代の我等が苦悶にあらずや。あはれ文の上の友ともみえざる若きルネェよ、御身が明眸の、などかくくもりがちなる。な憂ひそ、な嘆きそ、理性と迷信との街に迷ひし御身こそは、猶自然のうちに淋しき憂愁の味を甜めえて、涙の神を奉ずるの幸はありたれ。理性の玉を懐(いだ)ひて、却(かえ)って不信條の罪ある今の我等をいかにかはせん。

（中略）

「哀調」梓(し)に上(のぼつ)て僅(わず)かに旬日、訳者憂愁の筆を抱いて、将に何処(いずこ)にか往(ゆ)かんとするや。六日正午、君を送って新橋に別てより、天候可ならず、我また病蓐(びょうじょく)の人となりぬ。

（下略）

とあるが、臨川は当時帝大工学部の学生であったが、文八と一番親しい友人であった。

かね未亡人の話によれば、文八は、帝大佛文科に進学したい希望をもっていたが、父小島中佐は、文弱に流れることを恐れ、許るさなかった。父は三井物産重役の某氏と相談して、大阪支店調査部に追いやることにしてしまった。文八は愁いをいだいて、二十五年十二月六日正午、臨川らに送られて新橋から出発したのである。

次に小山内薫の感想の一部を紹介しょう。

逢ふに何のまがきあらむ。抱くに何のしがらみあらむ。共に歩みて人あやしまず、共に歌いて人うらやまず、しかも地上遂に成り難きは、『はらからの恋』なり。ああ『はらからの恋』！これを口にするだに人は眉をひそむるものよ、眼をいからすものよ。然れどもわれは信ず、神はまれながら『はらからの恋』造り給ふを。

われに一友あり、はらから恋ひ得で、失(う)せきと伝ふる卆塔婆(そとば)のほとりに、月悲しき夜にさまよひて、歌へる歌の一ふしに、

恋とは恋なり　人にはあらず
恋とは恋なり　み神のこころ
君若し恋せば　兄をも捨てな

と云へり。『はらからの恋』よ、汝は、なぐさめの歌を得たり。

（中略）

シャトウブリアンの「ルネェ」、小島文八訳して「哀調」と云ふ。これを読むに句に涙あり、章になげきあり、たちまちわれをして『枯野のそとば』をおもはしめ、軽兄妹をおもはしめ、マンフレッド、アスタルトをおもはしめぬ。

（中略）

これもと一篇の訳文なれども、はしがきを見るに、こは、さながら小島君の主観なるが如し。小島君よ、君は、『命運の神のにへにして』と云ひ給へり。然り、ルネェも然り、アメリーも然らむ。然れどもルネェならば、アメリーならば、之を『攝理の神』と呼びて、

これに仕へ、これに祈り、これに感謝せむ。小島君よ、ただひたすらにかなしみ給うな。ルネェがなげきの陰にほほゑみあり、アメリーが涙のうしろによろこびあり。君も身を神にささげて、かれのほほゑみとかの女のよろこびを身にしめ給はずや。

と結んでいる。

薫は、文八にも、きっとアメリーのような女性がいたと信じている。はしがきを見てもわかるように、ルネェは文八だと断定しているのである。一人子の文八には姉はいなかった。しかしアメリーに相当する女性がいたかも知れない。それは、あるいは、楞牛に嫁した杉里子だったかも知れない。しかしこれはあくまでも私の仮説である。

薫は、当時第一高等学校の学生であったが、「むさうあん物語」三によれば、学校で、古事記の軽の皇太子と衣通姫（そとほし）の物語が講読されて以来、彼ら、すなわち、竹林や小山内や川田順や金沢たちの間で、さかんに兄妹の恋が高唱されていたようである。薫の批評が、ねっとりと、訳者その人の私行にまでからみついてきたのは、そのためであろう。

次に三津木春影の文を引用しょう。

何より記し申すべきかと、幾度か迷ひ申し候へども、幾度も幾度も、ただかかる思ひのくり返さるるのみに候。この思ひは、忘られぬ紀念（かたみ）に候べし。「哀調」一篇、君が紀念の一として、吾手に幾度か、昔思ふよすがとも成り候はん。されば善悪の詳しき品定めは、臨川兄、なでしこの君の手に成り申すべければ、吾はただ、かりそめなる音信のすがたとして、この紀念を記さんと思ひ立ち候。

（中略）

君は、げにかりそめならぬ旅をしたまふ。人の世に出で立つといふはじめとか。友をのこし、都をのこして、西浪速は楽しく候か。別れては、いや更らに思ふこと多かるべく候。かかる時、江戸川近くのお家に訪れしこと、矢来の家に来たまひしこと、若松町へも、原町へも来たまひし時のこと、または、うつぼ兄と、神田にかの國士の風を見んとまゐりしことなど、あからさまに思ひ出でられ申し候。かかる時こそ、げに昔思はるるに候へ。かかる思ひして、吾はルネェの物語を読み申し候。ありしこと、さまざまを思ひ出でて、人なき室に、「哀調」の若さルネェを忍び申し候。あらず、それはルネェの上のみに候はざらん。若き君よ、吾は思ひをうつす筆の拙きを悔ひ候。吾は吾が情の偽り多きを悔ひ候。されど神はゆるしたまはんことを信じ申し候。君、ことごとしき吾を許したまへ。さらば君、健康と心の平静とに、君が楽しき空想のかぎりなからんことを。

と結んでいる。おとなしい春影は、薫のように、だいたんな批評もできず、ひたすら先輩との別れを惜んでいる文章に終っている。

なお、窪田空穂の、前記『思ひ出す人びと』の中には、

小島洒風君は、外国語学校の佛語科の人で、フランス文学の紹介者をもって任じ、シャトウブリアンの翻訳を、「哀調」と題して、白鳩社から出版させた。その頃は、ロシアの小説が驚異の中心となっていて、フランスの小説というものは、私たちには問題とならず、したがって小島君の翻訳も、多くの注意を払われなかった。

と言っている。空穂や春影らの早稲田系の学生の間には、ロシヤの寫家主義文学が流行していたので「哀調」は、異様な小説と受けとめられたのかも知れない。

しかし「明星」派をはじめ、ローマン派の人たちには注目されたようであるが、文八が大阪に去って文壇との交渉が中絶したためと後続の作品がなかったために、いっともなく多くの人に忘れられたようである。

一年後に東京に帰り、その頃は、とくに国木田獨歩や中澤臨川と親しくなり、文壇に帰り咲くかと思われたが、日露戦争に召集されて再び文壇から消えて行った。がそのことはいずれ稿を改めて書くことにしょう。

昭和十三年六月に畠中敏郎氏が、岩波文庫の「アタラ」「ルネ」を書いた時、

私の知る限り、「アタラ」「ルネ」の邦譯本には故生田春月氏の獨逸語からの重譯があるだけであったが、近頃になって林文雄氏の譯がある事を知った。

とあり、昭和十五年の再版の時

明治三十五年頃、小島文八といふ方が「ルネ」の譯を「哀調」と題して出版せられた事のあるのを、私は不敏にして初版発行後に知った。その當時の讀書子を動かした其の譯書はまだ手にした事がないが、小島氏の原稿は同氏未亡人かね女史及び其の縁辺の方の御好意で拝見することを得た。

と書いている。「哀調」と「ルネ」のたどった、不幸な日本文壇史が偲ばれる。（50・11・20）

**注**(1)「明治大正文学研究第十七号（昭30・9・10）
(2)蒲原有明をさす。
(3)「生命の廃墟」文八の回顧記。未刊。
(4)「東京の三十年」、大正六年出版。
(5)明治二十九年八月発行。
(6)「窪田空穂文学選集」第一巻『思ひ出す人びと』
(7)「芦花全集」第三巻『富士』第八章。

高松短期大学研究紀要

第　6　号

昭和51年3月1日印刷
昭和51年3月10日発行

編集発行　高松短期大学
〒761−01　高松市春日町 960

印　刷　新日本印刷株式会社
高松市木太町 2158